

リンゴの新品種とその特性

秋田県果樹試験場

鈴木 宏

リンゴの品質については、栽培技術も大いにあるが、より以上に、おいしい品種ということがよくいわれる。新しい品種に対しては農家も血まなこになって探し求め、常に良い品種への更新をはかっている。最近話題の新しい品種について述べる。

1. 青リ2号

来 歴 青森県リンゴ試験場において、ゴールデン不明品種(祝ではないかといわれている)を交配して育成したもので、昭和45年3月に青リ2号と仮称命名した。

樹 勢 樹令とともに開張性になり、ゴールデンより弱い。隔年結果性が少なく豊産である。

果 実 平均果重300g前後、果形は長円形、果皮色はふつう新聞紙をかけた場合は緑黄色に、赤の太い立縞が入りそのうえに淡紅色となる。果肉は黄白色でち密で歯切れよく、微酸があって、多汁で味は良好である。

リンゴ関係県で試作の結果は第1表の通りである。現在早生品種の祝のあと、レットゴールまでのつなぎの良い品種がなかった。青リ2号の場合、このつなぎ品種として期待される。短所としては、無袋栽培では色つきの良い果実が得られないこと、側果にサビの多いことから、有袋栽培をしなければならない。また、収穫前に落果がみら

れるので、落果防止剤の散布が必要である。貯蔵は約1カ月よりないから、大量の栽培は困難と思われる。各県とも増殖の傾向にある。

2. 着色系の「ふじ」

来 歴 ふじは、農林省東北農業試験場園芸部で国光にデリシャスを交配して育成したもので、昭和33年園芸学会に東北7号として発表、昭和37年「ふじ」と命名、「リンゴ農林1号」として登録された。

樹 勢 樹勢は樹令とともに開張してくる。枝条が下垂する傾向がみられる。葉などは国光に似ている。未だ生産量が少なく、着果過多で隔年結果をさせているような状況である。普通の着果では豊産である。

果 実 平均果重320g前後で、デリシャスより大きい、形状は円から長円形である。果肉は黄白色、肉質は粗雑でかたく酸味は少ない。しかし、ジュースが多く味は良好である。

この品種は採取当時から味がよく、しかも4月頃まで貯蔵がきくことから、秋から春まで需要があり、ゴールデンを圧迫している。ふじは無袋栽培すると味がすぐれているが、色つきが悪いので、着色袋を使用して、色つけに苦労している。

栽培本数が多くなり、色つきの良い系統が各地に発見され、本県では次の4系統に分類し、品質を検討している。

着色系ふじ1系 果実全面に着色するもの、現在長野県の波多腰氏の1系と同じものである。肉質がボソボソし、あまりすぐれない。熟期がおくれる傾向がみられる。

着色系ふじ4系 果実に太い縞の入るもの。本県では現在1種みられている。玉が一寸小さい。

この2つの系統を基にして、更に2系統に分け

第1表 青リ2号各地の試作結果

試験場名	平均1果重	糖度	酸	果実硬度	調査日	備 考
青森園芸試験場	260g	12.4	0.297	12.3	9月11日	収穫前落果多し
岩手園芸試験場	285	12.3	0.59	11.0	9月19日	着色悪し
秋田果樹試験場	336	12.4	0.25	12.8	9月20日	落果多し
秋田果試花輪分場	408	12.2	0.369	11.7	9月18日	落果多し、無袋着色不良
山形園芸試験場	353	12.4	0.28	13.3	9月13日	"
福島園芸試験場	320	13.0	0.26	14.5	9月4日	着色不良
長野園芸試験場	320	14.2	0.254	13.4	8月31日	ビタービットの発生

ている。

着色系ふじ2系 1系のように全面濃紅に着色するが、かすかに太い縞が見えるもの。

着色系ふじ3系 太い縞が強くあらわれるが、果面全体にうすく着色するもの。

この4つの系統に分けて検討を加えている。各地に、このような色つきの良い系統の枝変りがみられるので、省力栽培の点から無袋栽培をすれば、色つきの良い系統を植える必要がある。着色系には、ウィルスを保毒して、色のよくつくものもあるので注意する。ふじは粗皮病にかかりやすいので、マルパ台木かM106を使用する。

3. 東 光

来 歴 青森県りんご試験場がゴールデンに印度を交配育成したもので、昭和38年春、園芸学会に発表したものである。

樹 勢 枝条の形質はゴールデンに類似する。強勢である。新梢葉に印度に現われる黄変葉がみられるが、大きな被害はないようである。成りはじめはゴールデンよりややおおい。

果 実 平均果重254gで、果形は円錐形でまれに不正形を生ずる。果色は黄緑色で、陽光面はわずかに淡紫紅色となる。果肉は白黄色でち密、年を越すと次第にやわらかくなるが、おいしい。採収当時は酸味強く、一種特有な芳香を有し、味

が良好である。

このリンゴの長所は、肉質が非常にソフトで多汁、長期の貯蔵に耐えて味の変らないことである。2月頃に食べると非常においしい。また、独特の芳香は外人好みとされる。果皮をむくときに、手に移り香がするほどである。キレイな花にトゲのあるように、この品種は果形の不正形なことと、芯カビが多くでること、袋かけがおけるとグリンスポットなどの果面障害が多く、収穫前の落果が多いことである。

4. スーパータイプの枝変り

前年伸びた若い枝に、多くの腋芽から発芽して短果枝が着生するもので、一名短果枝型枝変りと呼んでいる。現在わが国では、アメリカより導入されたデリシャス系のものが試作されている。スタークリムソン、レットスパー、ウエルスパー、ミラースーパー、オレゴンスパーなどがある。

長所としては、植付後結実するまでの年数が早く、普通の樹の大きさの8割くらいである。(半矮性)結実性が良好である。色つきが早く、色も良い。剪定は少なくても良い。短所としては枝の分岐角度が狭いこと、果実の糖度が、普通のスターキングなどより、1—2度低いことから、普通デリシャス系の販売後に出荷するようにする。

西は猛暑、北は冷夏

ことしは梅雨が長そうだ—

気象庁は5月21日、6月から向う3カ月間の長期予報を発表した。

これによると“梅雨は長く、北日本は真夏の天候が不順で冷害の恐れがある”と警告している。すなわち、今年の北半球は北極付近が非常に冷たくて、4月半ばに現われるはずの「極」の高気圧が姿を見せたのは5月半ば。しかも夏の主役である太平洋高気圧の北上も遅れており、また台風が1個も発生しないなど、大気の流れが大きく乱れている。

こうした異変は、日本などのような中緯度地帯の梅雨から真夏にかけての天候にも影響を与え、特に北日本では昭和41年以来の“冷たい夏”が訪れる可能性が強いという。

<6月> 上旬早くも梅雨前線が北上し、梅雨入りは全国的に早め。昨年と同じようにドカッと降ってはサッとやむ陽性型の梅雨になりそう。下旬、オホーツク海の高気圧が強まり、北日本は梅雨寒で低温が続き、全国的に大雨の恐れがある。

<7月> 中旬1時的に梅雨の中休みがあるが、そのあと再び前線の活動が活発になり、梅雨明けは平年よりかなり遅れる。北陸、北海道など北日本は天候不順で平均気温が低くなりそう。

<8月> 全国的にかなり暑くなり、特に西日本は平年をぐんと上回る猛暑になりそう。しかし日本海側では晴天が長続きせず、日照不足や大雨で、農作物への被害が心配される。

台風は2個、本土に接近または上陸する見込み。